

2026 年 9 月 4 日

報道機関 各位

高齢者が「住まい」に見いだす意味とは何か？ ～その人らしい暮らしを支える在宅ケアのあり方を提起～

【本研究のポイント】

・健康上の気がかりを抱える高齢者が「住まい(HOME)」^{注1):P4 参照}に見いだす意味を分析:

65 歳～95 歳(平均 73.3 歳)のさまざまな地域で暮らす高齢者 54 人へ「住まいの意味」に関するインタビューを行い、参加者に共通してみられた意味を整理しました。

・高齢者が「住まい」に見いだす 4 つの意味:

①生活が自律的で自立していること、②生活の継続性を支える住環境があること、③慣れ親しんだ愛着のある場所であること、④自分にとって意味ある他者とのつながりがあること という 4 側面に整理されました。

・「住まいの意味」を尊重し、その人らしい暮らしを支える在宅ケアのあり方を提起:

在宅ケア専門職には「生活へのコントロール感覚・住環境への慣れ親しみと愛着・その人が望む距離感と役割を尊重しながら自立・安全・他者とのつながりを支える」ケアが求められます。

【研究概要】

名古屋大学大学院医学系研究科の拝田 一真 助教は、千葉大学運営基盤機構ダイバーシティ推進部門の山崎 由利亜 特任助教、千葉大学大学院看護学研究科の菅原 七海 院生と共同研究を行い、健康上の気がかりを抱えながら暮らしている高齢者 54 人に対して「住まいの意味」に関するインタビュー調査を実施しました。

研究参加者は平均 73.3 歳であり、男性 33 人・女性 21 人でした。健康上の気がかりは筋骨格系が最も多かった一方で、51 人は自立歩行が可能でした。居住状況は一軒家36人・集合住宅18人、持ち家48人・賃貸住宅6人でした。居住地域は、都市部19人・郊外29人・農村/漁村地域6人でした。このような特徴の高齢者らの語りから明らかにされた「住まいの意味」は、①生活が自律的で自立していること(他者から干渉されない自由と他者に迷惑をかけない自立性が保たれていること)、②生活の継続性を支える住環境があること(周辺地域を含む住環境に安心安全・静穏性・利便性が備わっていること)、③慣れ親しんだ愛着のある場所であること(慣れ親しみと個人史やこだわり根ざした愛着を感じられること)、④自分にとって意味ある他者とのつながりがあること(心地よい距離感で他者とのつながり役割を通じて支え合うこと)という 4 つの意味に整理されました。本研究は、在宅ケア専門職には、その人らしい暮らしを支えるために、その人それぞれが大事にしている「住まいの意味」に関心を寄せ「生活へのコントロール感覚・住環境への慣れ親しみと愛着・その人が望む距離感と役割を尊重しながら自立・安全・他者とのつながりを支える」ケアが求められると提起しています。

本研究成果は、2026 年 9 月 2 日に国際学術雑誌『International Journal of Qualitative Studies on Health and Well-being』にオンライン掲載されました。

高齢者が「住まい」に見いだす4つの意味

健康上の気がかりを抱えながら地域で暮らす高齢者54人へのインタビューで明らかに

1 自律的で自立している生活

- 他者から干渉されずに自分の自由に過ごすことができる
- 他者に迷惑をかけずに自立して過ごす



3 慣れ親しんだ愛着のある場所

- 長年の居住体験による慣れ親しみ
- 個人史とこだわりに根ざした愛着



2 生活の継続性を支える住環境

- 周辺地域を含む住環境に安心安全、静穏性、利便性が備わっていること



4 自分にとって意味ある他者とのつながり

- 心地よい距離感で他者とつながる
- 役割を通して他者と支え合う



参加者属性

- 年齢: 平均73.3歳(65~95歳)
- 性別: 男性33人、女性21人
- 健康上の気がかり(頻出順): 筋骨格系、循環器系、認知機能
- 歩行機能: 自立51人、要補助具3人
- 居住状況: 一軒家36人、集合住宅18人 持ち家48人、賃貸6人
- 居住地域: 都市部19人、郊外29人、農村/漁村地域6人



在宅ケアは、その人それぞれの『住まいの意味』を理解し尊重する必要がある

【研究背景と内容】

近年、日本では、介護が必要になっても住み慣れた場所で暮らし続けることを望む高齢者が多く、在宅ケアはその生活を支える重要な役割を担っています。しかし、高齢者の住まいは病院や高齢者施設と違って、ケア提供が主目的である場所ではありません。そこには、アイデンティティや自立・自律性、愛着、安心安全、大切な活動、他者・地域とのつながりといったさまざまな個人的な意味が込められています。そのため、画一的な在宅ケアの介入は、私的な生活空間を公的な場へと変質させ、その生活体験を損なわせてしまいます。加えて、健康上の課題自体も、高齢者が住まいに見いだしている意味に影響を及ぼし、療養生活をより複雑にします。そのため、在宅ケアに携わる専門職には、高齢者が住まいに見いだしている意味を理解し、その人の暮らしを尊重することが求められます。これまで、高齢者の「住まいの意味」は「Meaning of home」という包括的視点から欧米諸国を中心に探求されてきており、アジア、特に日本で実施された研究は限定的です。そこで本研究では、健康上の気がかりを抱える日本の高齢者が「住まい」に見いだす意味を明らかにし、在宅ケアへの示唆を得ることを目的としました。

本研究では、訪問看護サービスとオンライン調査パネルを通じて参加者を募り、計 54 人の健康上の気がかりを抱えながら地域で暮らす高齢者に対して、「住まいの意味」に関するインタビューを行いました(調査期間:2024 年 9 月~2025 年 9 月)。今回、高齢者施設に居住する人は参加者に含まれていません。語りの分析にはリフレクシブテーマ分析を用い、参加者の語りに共通して見られた「住まいの意味」のパターンを検討、整理しました。リフレクシブテーマ分析は、分析者が自身の経験や価値観がデータ分析に及ぼす影響を内省しながら能動的にデータに関わることを重視する質的分析方法の一つです。

参加者の平均年齢は 73.3 歳(65~95 歳)で、男性 33 人・女性 21 人でした。健康上の気かりは筋骨格系が最も多く、次いで循環器系、認知機能でした。歩行状態は、自立 51 人・要補助具 3 人でした。居住状況は、一軒家 36 人・集合住宅 18 人、持ち家 48 人・賃貸住宅 6 人でした。居住地域は、都市部 19 人・郊外 29 人・農村/漁村地域 6 人でした。分析の結果、参加者が「住まい」に見いだす意味は、①生活が自律的で自立していること、②生活の継続性を支える住環境があること、③慣れ親しんだ愛着のある場所であること、④自分にとって意味ある他者とのつながりがあることの 4 つに整理されました。

<分析結果>

①生活が自律的で自立していること

(他者から干渉されない自由と他者に迷惑をかけない自立性が保たれていること)

参加者は、ライフスタイルや趣味活動、好みに合わせた内装など「何でも自分の好きなようにできる自由」を住まいの意味として捉えていました。この「自由」に関する語りの根底には、日常生活における他者からの干渉を避けたいという願望がありました。そして、外出が難しいなど、健康上の気かりが日常生活に顕著な影響を及ぼすようになると住居内で自由に過ごせることは、特に重要視されていました。合わせて、参加者は「自立した生活」を住まいの意味として捉えていました。参加者は、できる限り長く住み慣れた自宅で暮らすことを希望する一方で、家族、特に子供への介護負担を懸念し、運動・認知機能の自主的なトレーニングを行っていました。

②生活の継続性を支える住環境があること

(周辺地域を含む住環境に安心安全・静穏性・利便性が備わっていること)

参加者は「住まい」を長期的に日常生活の維持ができる場所として位置付けていました。この意味では、安心安全を支える住宅機能が強調され、具体的には、防災・防犯性能が重視されていました。さらに、参加者は居住地域の自然の豊かさとともに、スーパーや公共交通機関、医療機関が近くにあるといった利便性も求めています。健康への懸念が高まるにつれて、徒歩圏内で生活が完結することが特に重視されていました。

③慣れ親しんだ愛着のある場所であること

(慣れ親しみと個人史やこだわりに根ざした愛着を感じられること)

参加者は、長年にわたる居住経験を通じて育まれた「慣れ親しんだ感覚」を住まいの意味として捉えており、安らぎや落ち着きを感じていました。この感覚は近隣地域を含む住環境における音や匂い、風景、空間、物などに慣れ親しむことで育まれていました。また、「住まい」は個人の歴史やこだわりに結び付いた強い愛着を感じる場所としても位置付けられていました。個人史は家族写真、子供達との思い出の品々、馴染み深い地元の風景といった具体的な思い出を通して表現されました。自身のこだわりが反映され大切な私物に満ちた生活空間は、住宅機能と身体機能の不一致(階段が多く住居内移動が大変など)よりも優先されることがありました。同時に、参加者は、人生の終わりに備えて断捨離を行う必要性を感じつつも、大切な私物を手放したくないという願望の間で板挟みになっていました。

④自分にとって意味ある他者とのつながりがあること

(心地よい距離感で他者とつながり役割を通じて支え合うこと)

参加者は、「家族や近隣住民とのつながり」を住まいの意味として位置付けていました。しかし、あらゆるつながりが望ましく思われていたわけではありません。参加者は、自分が心地よいと感じる距離感でのつながりを求めています。さらに、参加者は、「役割を持ち他者と支え合う」ことも住まいの意味として重視していました。役割は、家族が集まれる場所を維持すること、墓の手入れ、ペットの世話など、人によってさまざまでした。健康上の気かりは、近隣住民からの支援(買い物代行など)の重要性を高めていました。

【成果の意義】

本研究の意義は、健康上の気がかりを抱えながら地域で暮らす日本の高齢者が見いだす「住まい」の意味が、欧米諸国を中心に探究、蓄積されてきた知見と概ね一致していることを示した点にあります。これによって、「住まいの意味」に関する知見の多様性を高めることができました。同時に、本研究は「住まいの意味」の具体的な表れは健康状態や社会・環境的文脈によって形作られることを示しており、「住まい」の意味を個別的に理解しようとすることの必要性を強調しています。本研究は、在宅ケアに携わる専門職はその人らしい暮らしを支えるために、その人それぞれが大事にしている「住まいの意味」に関心を寄せ、その意味を尊重したケアを行うべきだと提起しています。そして、「住まいの意味」を尊重するケアの基盤は「生活へのコントロール感覚・住環境への慣れ親しみと愛着・その人が望む距離感と役割を尊重しながら自立・安全・他者とのつながりを支える」ことです。本研究は、JSPS 科研費 JP24K20373 の助成のもとで行われました。

【用語説明】

注 1) 住まい:

本リリースでは、海外の先行研究を踏まえて、建物としての住宅にとどまらず、アイデンティティをはじめとするさまざまな個人的な意味に関わる多面的な現象として本研究で探究した「HOME」を、「住まい」と表記している。

【論文情報】

雑誌名: International Journal of Qualitative Studies on Health and Well-being

論文題目: Meaning of home among community-dwelling older adults with health concerns: a reflexive thematic analysis

著者: Kazuma Haida, Yuria Yamasaki, Nanami Sugawara

DOI: 10.1080/17482631.2026.2721734

URL: <https://doi.org/10.1080/17482631.2026.2721734>



東海国立大学機構は、岐阜大学と名古屋大学を運営する国立大学法人です。
国際的な競争力向上と地域創生への貢献を両輪とした発展を目指します。
東海国立大学機構 HP <https://www.thers.ac.jp/>

